
ある日世界の向こう側

遠野ユニコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日世界の向こう側

【Nコード】

N0954U

【作者名】

遠野ユニコ

【あらすじ】

ある日突然、異世界召喚された女子高生の莉緒。特技は漫画書き（得意分野BL）な腐女子が召喚された理由は、世界を救う為でもなく、誰かの花嫁になる為でもなく、ただ単に王女様の誕生日の余興の事故だった。戻る手立てもない異世界で、莉緒は決心する。

こうなったら漫画を書きまくって、この異世界に漫画文化を広めてやろう！ついでに金も儲けてやる！…そんな、恋に鈍感な女の子の恋と友情と妄想の物語。この小説はBLものではありませんが、主人公の書く漫画の題材としてBLが出てきます。

ブログ

わたしの名前は、イチノセリオ一ノ瀬莉緒

花も恥らうピッチピチの17歳。

優しい両親と、ちょっと生意気だけど可愛い弟がいて、家はそれなりに裕福。

仲の良い友人もいるし、運動は少し苦手だけど、学校の成績はまあまあ悪くない。

彼氏はいないが、情熱をかたむける趣味があるし、ちょっとした特技もある。

つまり何が言いたいかというと…わたしは恵まれているし、幸せな人生を送っていたということだ。

だが一瞬にして、わたしは全てを失った。

持っているのは、若さと根性と培ってきた技能のみ。

わたしは今、異世界にいる。

さらば愛しき日常よ

その日わたしは、新作の構想を練るべく愛用の勉強机に座っていた。

机の上には、3日前ついに書き上げた長編漫画「愛と絶望の舞踏会^{ロンド}」の原稿と、午前中に画材屋で購入した真新しい原稿用紙、そしてメモ帳代わりにしている広告の裏紙と、ついでに口寂しい時の相棒のお菓子が並んでいた。

今日から三連休で学校は休みだし、両親は仕事で居ないし、小うるさい弟は部活の試合とやらで出かけていて家にはわたし一人・・・ああ自由だ。

しかしながら、なかなかいいアイデアが浮かばない。一応こいつで小金を稼いでいたりするので、ヘタなものは描けないのだ。それに少ないながらも応援してくれるファンもいる。

「うーん、愛と絶望の舞踏会は現代ものだったから、今度はファンタジーにしてみようかな」

剣と魔法の物語。誘い受け王子に鬼畜なドS魔法使い・・・うむ、なかなかいいのではないか？

つらつらと思いついた事をメモしながら、左手をお菓子に伸ばそうとした時、目の前の白い壁がぐにやりと歪んだ。それはもう、ありえないくらいグンニヤリと。

「は？...え？」

所謂、目の疲れてやつ？んな馬鹿な。

いやいや、なんか青白い光も見えるんですけど？
っていうか、足元の魔方陣的なものはなに？

呆然とするわたしをよそに、歪みは大きく広がり、突然ぱちんと消えた。

こうしてわたしの日常も、ぱちんと――消えた。

ようこそ異世界へ 1

人間、びっくりしすぎると頭が働かなくなるというのは本当らしい。

とりあえず一言、「ここはどこだ!？」と言いたいが出ない。

どこかの宮殿の一室のような、やたら豪華な部屋にわたしは居た。
おまけに見知らぬ外国人達に囲まれて。

とりあえず、お菓子を取ろうとしていた左手をそのまま頬に持つてきて、つねってみた。思いつきり。

「…痛い」

……夢ではないらしい。

なんだこれ?どつきり?なんでわたし、こんな所にいるんだ?それも机ごと。

わけが分からな過ぎて、なんかもう笑えてくる。

誰か一人位、現状の説明をしようという親切なお方はいないんでしようかね?と周りを見渡すが、誰も彼もがポカンと口を開いてわたしを凝視するばかり。

くっそー、全員びらびらしたコスプレしやがって。ここはどっかのコスプレ会場か?

その時、近くにいた男がすつと進み出た。

うわっ、なんだこの美形!!

もしわたしが口にお茶を含んでたら、思いつきり吹き出していたところだ。

「私は、アルタヴェルガ王国・青の宮廷魔術師、エルレイディオ・ルーラレイトです。私の言葉が解りますか？」

私の目から視線を逸らさず、真っ直ぐ見つめてくる瞳は、美しいアイズブルー。

わたくし日本人なんで、そう目を凝視されると気まずいんですが。

年の頃は20代前半位だろうか。

美形は声まで美しいのだな、と妙に感心してしまう。

肩にかからないくらいの髪はなんと銀髪。この艶々キラキラ具合は、おそらく天然ものとみた。

絶妙に配置された全てのパーツが完璧で、男臭さはあまり無く、まるで精巧に造られた人形のようなうだ。ヒゲ生えるとかトイレ行くとか全く想像出来ない。

背もスラリと高く、ローブのようなものを着ているからよく分からないけど、足も長そうだ。

ああ、写真撮らせてくれないかな。売れば笑いが止まらん程がつぼり…って、今はそんな場合ではなかった。

「言葉は解りますけど…それより家に帰りたいので、最寄り駅教えてくれませんか？あつ、それと携帯貸してもらえると有難いんですが」

この際、自分が机と一瞬に空間移動したつばい事や、あの変な光とかの疑問は置いて、現実的な状況の打開策を考えよう。

とにかく家族に連絡を取るのだ。今すぐ家に帰るのだ。

「申し訳ないのですが、私はけいたいというものを持っていないので、お貸しすることが出来ません。それと大変言い難いのですが…
…貴女がご自分の家に帰ることは出来ません」

「……………は？」

えつと、今この美形のコスプレ青年から、なんか理解し難い言葉が聞こえたような……。

帰れないとかなんとか、幻聴か？

「やだなあー、またまたご冗談を。エイプリルフルはとくに過ぎてますよ」

その冗談まったく笑えませんか、マジで。

「よく聞いて下さい。貴女は、私と赤の魔術師の召喚術の事故により、この世界に召喚されてしまったのです。事故による召喚故に、貴女を戻す手立てがありません」

召喚って、あの漫画や小説に出てくる、あの召喚ですか？

そんなアホな！

すぐに誰かが「なーんちゃってね」とか言ってツッコんでくれるのかと思ったのに、誰も何も言わない。
なにこの重苦しい空気。

—————あのお、ちょっと気絶していいですか

ようこそ異世界へ 2

召喚。

事故。

戻れない。

三つの単語が、グルグルと頭を廻る。

わたしの図太い精神は、このしょうもない現実からの逃避を許さなかった。ああホントに気絶したい。

視線を下に向ければ、いつも通りの愛用の勉強机が目に入った。

ほんの数分前と何も変わらないように見えるのに、ちょっと視線を上げれば、見たくもない現実を思い知らされてしまう。

……冷蔵庫のプリン、楽しみにとっておいたのに、もう食べられないのか。こんなことなら昨日食べときゃよかった。それにこの「愛と絶望の舞踏会」だって、せっかく完結したつてのに……。パパとママと翔太、心配するかな…突然娘が行方不明になるんだもん、そりゃ心配もするか。しかも机ごと消えるとか意味不明だし。とりあえず今までの作品全部、机の引き出しに保管してたのが唯一のマシな事か。親に自作のBL漫画見られるとか、なにその羞恥プレイ…つてか、本棚の奥にウフフな本隠してるっつーの！あれ発見されたら憤死するわ！

「…その、あまり気を落とすな。そなたに不自由のないよう出来る限り取り計らう故、そろそろ顔を上げてくれぬか」

それは、先程の超絶美男子のものとは違う、落ち着いたオッサンの声だった。どうやら新キャラの登場らしい。

うん、まあね、いつまでも机に座って俯いていたって仕方ないもんね。わたしはゆるゆると顔を上げた。

目の前には、髭を生やした風格のあるオッサンが、どこか気遣わし気な表情を浮かべて立っていた。

髪は濃い金髪で、瞳は綺麗なエメラルドグリーン。年齢はよく分からないが50歳くらいだろうか？

オッサンの両隣には、腰に剣を差した騎士っぽい人が控えていて、何かへたな事やりやがったら、いつでも斬り捨ててやるぜつとばかりに眼を光らせている。怖えーよ！

「わしは、ルードルフ・エルガルド・ソル・アルタヴェルガ。このアルタヴェルガの王をしておる」

でたー！最高権力者！いきなり王様登場ですか。そうですか、王様ですか。それにしても名前長いな王様。

「突然の事でそなたも混乱しているだろう。部屋を用意す故一旦休むとよい。先程も言ったが、こうなったのもこちらの責任。そなたには出来る限りの事はしたいと思っておる。案ずるな」

簡単に言えば「悪いようにはしないぞ」ということか。

「そうだな…そなたの事はエルレイディオ、青の魔術師に任せよう。責任の一端はこの者にもあるしな。とりあえず空いている客室に」

「父上！」

王様の言葉を遮るように、突然人垣の向こうから声があがった。
次の瞬間、人垣がさつと割れる。

近づいて来たのは、流れる金髪が美しい、まるで妖精のような美少女であつた。

「父上、わたくしがこの方のお相手をさせて頂いてよろしいでしょうか？ 見ればまだ少女。歳も近いわたくしの方が、なにかと気安いでしょう。それに、そもそも今回の事は、わたくしの誕生日の祝いの場で起こったこと。わたくしに出来る事があるのならば、誠心誠意をもつてして差し上げたいと思うのです」

美少女はわたしを見つめると、安心させるようにニコリと微笑んだ。父上つてことは、このコは多分王女様なんだから。うーん、近くで見るとますます美少女だ。

けぶる睫毛に薔薇色の頬、ふんわりと腰まで流れる髪はハチミツ色。瞳は王様と同じエメラルドグリーン。その可憐な造作は、まるで精巧に出来たビスクドールのよう。

わたしとそう年齢は変わらなそうだが、ほっそいウエストの上の膨らみは……くっ、何も言うまい。

「うむ、確かに娘同士のほうが気も安らぐかもしれないね……。そうだな、ではお前に任せようティア。だが、あまり気負い過ぎるのではないぞ。お前はあまり無理のきく身体ではないのだから」

無理のきかない身体って…えっ、まさか妊娠してるとか？
疑問が顔に出ていたのだろうか、王女様は恥ずかしそうに頬を染めた。

「わたくし、あまり身体が丈夫ではないの。だから父上も氣遣って下さって、この祝いの席も大勢の方に集まって頂くのではなく、こうして親しい人だけの内輪なものにして下さったのです。…父上、わたくしは大丈夫ですわ。ただお話しをするだけですもの」

あつ、そういうことね。

王女様のティータイム 1

そうこうするうちに話は付いたらしく、王様をはじめ、部屋にいた人々がぞろぞろと退出しはじめた。

結局残されたのは、わたしと王女様と王女様のお付きの侍女3人。それと扉の前の狒犬ポジションで睨みを効かす護衛の男2人だった。さすがに王女様と二人つきり、というわけにはいかないようだ。

一緒に異世界召喚された愛すべき勉強机は、わたしの尻を乗せたまま、変わり無く部屋の中央に鎮座している。王女様も最初は私を別室に案内するつもりだったらしいが、わたしは頑として机から離れなかった。

なんたつてこの机の中には、不特定多数の人間にはあまりお見せしたくないものが色々と入っているのだ。

ちよつと離れた隙に「どれどれ、これが異世界の品か」なんて、興味本位で引き出しとか開けられでもしたらどうする。

「これで静かにお話が出来ますわね。お茶の用意をさせましたので、こちらへどうぞ」

桃色のふんわりしたドレスを着た王女様が、ニコニコと愛らしい笑みを浮べて手招いた。

見れば、いつの間にか窓辺に置かれたテーブルの上に、ティーセットが用意されている。

足が沈みそうなくらいモフモフな絨毯の上を歩いて王女様の正面に座ると、テーブルの側に控えていた侍女さんがお茶を注いでくれた。

その流れるような無駄の無い手つきは、メイド喫茶のメイドさんとは風格が違う。もの凄くプロって感じた。

「まずは自己紹介を。わたくしは、アルタヴェルガ王国第二王女、シエステア・エルガルド・リル・アルタヴェルガと申します。どうぞティアとお呼び下さい」

うん、この国の人の名前がやたら長いのはよく分かった。ありがとうティアと呼ばせてもらおう。

「よろしくティア。わたしは一ノ瀬莉緒…えーと、こっち風に言う」とリオ・イチノセかな」

「まあ！リオ様とおっしゃるのですか。このアルタヴェルガには、リオ様と同じ名前のお花がありますのよ。紫色のとても綺麗なお花です。よければ今度お見せしますわね」

まるで宝物を見付けたみたいに瞳を輝かせたティアは、すぐに表情を戻してコホンと一つ咳払いをした。

「あの、リオ様。わたくし実は少々気になっていることが……」

言い淀むティアに、わたしはハッと目を見開いた。

「……まさか！この召喚の事故には何かしらの陰謀が隠されているとか！？」

「そ、そんなっ、違いますわ！」

「そうなの？」

「もちろんですっ。そうではなくて、その…リオ様が身につけていらっしゃるお召し物のことです。リオ様のお国では、女性がそのような格好をされるのは普通の事なのでしょうか？」

「格好って？」

「だからその、……そういう足が見えるような裾の短いお召し物のことです」

ティアはカツと顔を赤らめ、両手をほほに当てて俯いた。

えーと、なんなんだ？その反応は。ごめん、まったく理解出来ないや。

「別に、変なところはないと思うんだけど」

わたしが今着ているのは、近所のスーパーでママが買ってきたスウェットの下だ。

膝丈のパンツなので、確かにティアが言うように足は多少露出しているが、そんな歩く強制わいせつ罪みたいな格好ではない。

色はねずみ色だし、だいぶくたびれているので、ティアからすれば乞食のように見える可能性はあるが。

「あつ、もしかして。この国では足を出すのがNGだったりする？」

「えぬじー？」

「えっと、やっちゃいけない事っていう意味」

「いえ、特にやってはいけない、という事ではないですけど、そ

の…はしたないですし…」

なるほど、そういうこと。

確かにティアも侍女の3人も、足がきつちり踝まで隠れている。

この国の人の価値観じゃ、へそ出しやホットパンツで普通に外を歩く日本の女の子は、ハレンチ極まりない露出狂ということになるのだろうか。

「まあ、ほら、わたしの服のことはこの際横に置いて、ティアには他に色々と聞きたいことが――」

「そうですわ!」

突然ティアが立ち上がった。

「わたくしのドレスを今すぐ持ってこさせましょう。袖を通していないものが沢山ありますの。背丈もそれほど変わりませんし、リオ様ならきつとお似合いになるわ」

「えっ?」

「遠慮なんてなさらないで。ああ、どんな色のものもいいかしら。リオ様は髪も瞳も夜の女神リセラのごとき漆黒であらせられるから、青系統のお色が合うのではないかしら」

ああティアさん、すっごく目が輝いてますね。

でも、あなたのドレスは確実にわたしには合わない思っんですよ。

主に胸とウエストの部分においてですけど。(遠い目)

貧乳寸胴の幼児体型がそのドレスを着こなすなんて無理っす。マジ無理っす。

「……コホン、恐れながら姫様」

先程お茶を注いでくれた侍女が、うやうやしく口を開いた。

「まずは、リオ様が知りたいと思われるであろう事…召喚の術やり
才様が現れた時の経緯などをお話して差し上げたほうが宜しいかと
存じます。お召し物に関しましては、早急に仕立屋を呼び、新しく
作らせましょう」

ナイスっ侍女！グッジョブ侍女！

差し出がましい事を申しました、と侍女さんが頭を下げると、ティ
アは恥らうように頬を染め、そのまま椅子にストンと腰を下ろした。

「……駄目ですわね、わたくし。夢中になるとつい周りが見えなく
なってしまうて。ローラの言う通りです。申し訳ございませんでし
た、リオ様」

「ティア…」

「わたくしのドレスで間に合わせようなど、リオ様に失礼ですわよ
ね。ローラの言う通り、直ぐに仕立屋をお呼びし、生地や形などリ
オ様に本当にお似合いになるものを――」

そっちかよ！！！！

「えーと、ティア、その気持ちだけで十分だから。それより召喚の
事故つてのが起きた時の事が知りたいんだけど、一体何があったの
かな」

慌てて口を挟むと、ティアは少し残念そうな顔をしたが、直ぐに表情を戻し、静かに語り始めた。

「そう…あの時は確か……」

王女様のティータイム 2（前書き）

前半はシェスティア視点の語りになります。

王女様のティータイム 2

今日はわたくしの、15歳の誕生日でしたの。

あら、どうしたのですか才様？変な顔をなさって。

え？なんでもない？…そうですか、ではお話を続けますね。

本当は王族の誕生祝いとなると、貴族や他国の貴人をご招待して、舞踏会を開いたりなど盛大な催しになるのですけれど、わたくしの場合は身体があまり丈夫ではないことと、つい先日まで熱を出し臥せっていた事情もあって、今回は父上の計らいにより、家族や親しい方のみを集めた内輪な祝い場として下さいました。

家族と言っても、セルヴェリア姉様は他国に嫁いでしまわれましたし、ファルシェイド兄様も隣国テルトに遊学に行かれてしまっていて…。

あつ、べ、別に寂しいわけではありませんのよ。わたくし、そこまで子供じゃありませんもの。

こうして父上や母上、レオル兄様とユリア義姉様が祝って下さったのですから。

それにこのお部屋、ごく小規模な集まりの時に使われるお部屋なのですけど、青薔薇の間と呼ばれておりますの。

ほら、所々に薔薇の意匠が施されておりますでしょう？それに全体を青色と銀色で統一していますから、そのような呼び名になったのでしょうかね。

此処はわたくしとファル兄様が幼い頃によく遊んだ、お気に入りの場所の一つですの。

きつと父上はそれを知っていて、祝いの場にこの部屋を選んでくだ

さったのでしょうか。

あ、そうそう召喚術の事ですわよね。

実は数日前に父上から、何か欲しいものないか？と聞かれ、わたくし「でしたら誰も見た事のないような珍しい花が欲しいです」と我儘を申したのです。

わたくしがそんな事を言わなければ、リオ様にご迷惑を掛けることもありませんでしたのに…。

ということか？

つまり……父上が魔術師に、異界から花を召喚するようお命じになられたのですわ。

魔法の事はあまり詳しくないのですが、召喚の術はとても高度で、このアルタヴェルガでも一握りの人間にしか扱えないのですって。特に異界からなにかを召喚するのはとても難しく、生あるものや大きな質量を伴ったもの、それに誰かの所有にあるものは、界を渡らせる事が出来ないそうなのです。

けれど…例えば、“野に咲く小さな花”のようなものであれば召喚も可能だそうで、どうせならば宴席の場で赤と青の魔術師両名に、どちらがより美しい花が召喚出来るか競わせよう、という運びになったのです。

結局のところ、わたくしには何故召喚が失敗したのか、何故リオ様が召喚される事になったのかは分かりませんの。

あの時、

二人の魔術師がそれぞれ魔方陣を描き、同時に呪文を紡いだ瞬間、それに呼応して魔方陣が光りを発しました。

きつとそこまでは何の問題もない、普通の召喚術だったのだと思います。

…けれど次の瞬間、その光が突然交じり合うようにうねり、大きな一つの渦となったのです。

そして、その光の渦が最後に強い光を放ったかと思うと、そこにリ才様がいらっしやいました。

「事故ねえ……」

「…はい、詳しい説明は後ほど魔術師本人からあるかと思いますが、わたくしにはそれ位の事しか……」

話し終えたティアは、シヨボンと頂垂れていた。

きつとティアは、わたしに対して罪悪感を抱いているのだと思う。

自分が珍しい花を望んだ事がきっかけで、こんなことが起こってしまったから。

彼女はとても優しい女の子だ。

わたしがこの理不尽な状況に怒り狂って彼女を責めたとしても、彼女はきつとその怒りを黙って受け止める。

でもわたしはティアが悪いとは思わなかった。
彼女はただ、珍しい花が欲しいと言っただけ。

王様は…まあ、権力をかさに余計な事を命じやがって！とは思っ
れど、それも身体の弱い娘の喜ぶ顔見たさ、と思えば納得出来な
くもない。

魔術師は、王様から命令されりや、やるしかないだろう。受けたか
らには、成功させる自信もあつたはずだ。

誰もこんな結果になるとは思わなかった。
どこにも悪意なんてない。
これは事故なのだ。

「……はあ…なんか、甘いものが食べたいな…」

「リオ様？」

「もうこれでもかってくらい、腹がはち切れるくらい甘いものが食
べたい」

このやり切れない気持ちをどうにかしたい。

突然のわたしの発言に、一瞬キョトンと目を見張ったティアだった
が、何かを察してくれたのか小さく頷くと、すぐに沢山の菓子やケ
ーキを持ってくるよう侍女に命じてくれた。

このモヤモヤは、甘い物で埋めるしかない。

こつなつたらヤケ食いじゃっ！！！！
食って食って食いまくってやるっ。

王女様のティータイム 3

「あーもうダメっ。これ以上は入んない！ぐはあ、ぐるじい」

タルトのようなもの、ムースのようなもの、モンブランのようなものの、フィナンシェのようなもの…。

色とりどりのアルタヴェルガ産スイーツを、夢に見そうな程これでもかってくらい食べまくったわたしは、ふかふかのソファにだらしなく寝そべった。

はい、お行儀悪くてすみません。

扉前にいる護衛の、呆れたような冷たい視線はこの際無視する。

女三人寄ればかましいとはよく言ったもので、それが年頃の若い女の子とくればなおのこと。

服とかお菓子とか遭遇した面白い事とか、そんな他愛も無い事で私たちは盛り上がった。

中でも一番ティアが興味をしめしたのは、わたしが通っていた女子高の話だった。

この国には、貴族の子息が入る学校っぽいのはあるようだが、女の子が通うものではないらしい。だから女性だけが集まって学問を学ぶ機関があることに驚いていた。

反対にわたしが驚いたのは、こちらの世界の結婚適齢期の早さである。

男女共に16歳で成人とみなされ、女の子の場合は20歳過ぎれば行き遅れ扱い。

話を聞く限り、女は結婚して子供産んでなんぼ、というか…それが幸せという価値間が普通のようなのだ。

現代日本で育ったわたしには、そういう一昔前のような考えは古臭く感じるし、どうにもしっくりこなかった。

何はともあれ、そんなこんなでガールズトークに時間を忘れ、気付けば窓の外は暗くなっていた。

「どうしよう。結構余っちゃったなあ」

テーブルの上には、まだかなりのお菓子やケーキが残っていた。さすがのわたしも、ケーキバイキング並に盛られた山盛りスイーツを全て食べ切ることは出来なかった。

最初は、三人の侍女さん達にも一緒に食べないか声を掛けたのだが、「主と同じ席に着くなど、とんでもありません」とすげ無く断られてしまった。

ティアといえば、これまた小鳥並に少食で、そのウエストの細さの秘密を垣間見た気がしたものだが、おかげで戦力には全くならなかった。

「日持ちしそうな焼き菓子系はともかく、生菓子はなあ…。捨てちゃうのは勿体無いし」

一ノ瀬家には、“食べ物を粗末にするな”という家訓があるのだ。

どうしたものかと悩んでいると、いつの間にかティアが勉強机の前に立ち、何かをジッと見ているのに気付いた。

「なんか面白いもんでもあった?」

ぱんぱんの腹を摩りながら、ひょいと覗き込む。

「あつ! 申し訳ございません勝手に。あの…わたくし、こういった絵は初めてで、珍しくて」

「絵?…ああ、もしかして」

そういえば置きっ放しにしてたっけか。

愛と絶望の舞踏会。

私が魂込めて書き上げた、漫画の原稿だ。

「……何やら不思議な手法で描かれた絵ですわね」

「まあね。これは漫画っていう我が国日本の文化だよ」

ちよつと得意げに言ってみる。

少し大げさか? いやいや、漫画は日本が世界に誇る、ジャパニーズカルチャーなのだ。

「マンガ…不思議な響きの言葉ですわ。絵画とは違うものなのですか?」

「いや、そんな高尚な物じゃないんだけど、娯楽というか…とにかく色々な種類があつて、世界中で読まれるくらい人気はあるよ」

「まあ! 凄い! それに、読む ということは、これは書物ですね!」

うお！？凄い食いついてきたな、おいっ。

思わぬ勢いに、背中が仰け反ってしまった。

「いや、書物って言えばそうなんだけど。説明が難しいな、漫画は漫画だし」

例えていうならアニメの書物版か？って、アニメも存在しないか、多分。

「はあ…なんだか想像が付きませんわ。でも、リオ様の世界の大勢の方が、このマンガという書物を読んでもありますのでしょう？きっと、素晴らしく素敵なものなのでしょうね」

「……じゃあ、試しにちょっと読んでみる？」

そんなに言うなら、と提案すると、ティアの顔に大輪の薔薇のような笑みが咲いた。

「よろしいのですか！？」

「ひ、姫様っ」

侍女の一人が、慌てて声をあげた。

その顔には「そんな得体の知れぬものを手に取るなんてっ」と書いてある。

その心配はあながち間違いではない。

オタクの道は蛇の道。

特にBLは、底なし沼のように一度嵌ればズブズブと沈むのみ。

はてさて、このお姫様はどういう反応をしめすのか。
純粹培養の王女様を、未知の世界へご案内だ。

「えーと、確か一番下の引き出しの中に……」

どうせ読んでもらうなら最初からのほうがいいだろう、と机の引き出しを漁って、販売用に本にしてあった 愛と絶望の舞踏会 第一巻を取り出したところで、わたしはある事に気付いた。

漫画はもちろん日本語で書いてある。

そして、ここは異世界だ。

「ねえティア、これなんて書いてあるか分かる？」

取り出した一巻の表紙を、試しにティアに見せてみた。
書いてあるのは、イラストと題名、そして下のほうに書かれたペンネーム。

「……これはリオ様のお国の文字？なんと書いてあるのですか？」

「やっぱり日本語は分からないか」

「あのう、やはり文字が読めないと、マンガを読む事は出来ないの
でしょうか？」

恐る恐る、といった感じで、ティアが聞いた。

「そりゃあ、絵だけでも話の流れはなんとなく掴めるかもしれない
けど、やっぱり字が読めないと本当の面白さを味わう事は出来ないよ」

そんなものはイチゴのないショートケーキ、炭酸の抜けたコーラ、溶けきったアイスクリームのようなものだ。

「そ、そんな……」

ガーンツという文字が、ティアの頭上に見えた気がした。
ごめん、ティア。ぬか喜びさせて。

そうだよなあ、異世界アルタヴェルガ王国の人間が、日本語読めるはずないもんなあ……って、ちよつとまで。

だったら、言葉は？

「ほんと今さらなんだけど……」

ここまでまったく不都合なくきてしまったので、疑問にも思わなかったのだけれど。

「わたし達つていま、何語で会話してるわけ？」

コトバノモンダイ

異世界トリップもののお約束、その一。（言語の問題編）

？魔法でちょちよいと解決される。

？都合よく自動翻訳される。

？はたまた「言葉の問題？何それ美味しいの？」状態で、問題自体が華麗にスルーされる。

？苦労して地道に現地の言葉を学ぶ。

「リオ様は最初からずっと、ナスタリア大陸の公用語をお使いになられておりますわ」

「…………ええっ!？」

？突然、異世界語が話せるようになっていた。

そんな馬鹿な。

自慢じゃないが英語すらまともに話せないのに、そんな聞いたこともない異世界語を喋れるはずではないか。

驚くわたしに対し、ティアはただ不思議そうに首を傾げただけだった。

「わたくしてつきり、リオ様は公用語をご存知なのかと思っておりますが…………」

「いやいやいや、そんなわけないしっ」

私が喋ってるのは日本語だっ、と言いかけて、ふと違和感を感じた。
あれ？私、本当に日本語喋ってる？

「……………えー…あー…」

「リオ様？」

「とな、『隣の客はよく柿食う客だ』

「え？」

『私の名前は一ノ瀬莉緒です。異世界トリップしちゃった女子高生です』

「あのう？」

「今の、なんて言ったか分かった？」

「いえ…わたくしにはさっぱり」

「……………だよね」

まるで母国後のようにペラペラと話せていたから、自分は日本語を喋っているのだと思いこんでいた。

改めて意識してみれば、どちらも全く違う言語であることが理解出来るのだが、それはなんとも言えぬ不思議な感覚だった。

とはいえ、何故わたしが公用語とやらを話しているのかは、さっぱり解らないままだ。

「リオ様？どうかなさいましたの？」

「……なんだかわたし、突然こっちの言葉が分かるようになったや
つたみたい……」

「それは興味深いですね」

そう言葉を返したのはティアではなく、どこかで聞いたことのある
男の声だった。

振り返ると、入り口の所にいつの間にか銀髪の青年が立っていた。
輝く銀髪に冷たいアイスブルーの瞳。名前は確か……

「魔法使いのエルなんとかさん！」

「青の宮廷魔術師、エルレイディオ・ルーラレイトです」

「エル……？」

「エルレイディオ・ルーラレイトです」

「エ、エルレルラ？」

「エルレイディオ・ルーラレイトです」

「エ……エルレ……？」

「エルレイディオ……いえ、もう結構です」

フツと溜息をつかれた。

覚えられない私が悪いんじゃない。そんな呪文のような名前が悪いんだ、と声を大にして言いたい。

「ルーラレイト卿、何故ここに？」

ティアが問うと、造り物のような美麗な顔に、ほんの少しだけ思案するような陰が落ちた。

「まだ痕跡が強く残っているうちに、少し調べたい事がありましたので。王の許可は得ております」

言うなり、滑るように私に近づいてきた。

「な、なに？」

思わずジリジリと後ずさる私の腕を、エルの手が掴む。

「ちょっ、」

「少しジツとしていて下さい」

男にしては滑らかな、指の長いホツソリした手が、まるで包み込むように私の側頭部を捕らえた。

訳が分からず身じろぎする私を無視し、そのままジツと瞳を覗き込まれる。

はたから見れば、今にもキスされそうな体勢に見えるだろう。

だがエルの顔に、そういった甘やかなものは一切浮かんでいない。

ただ冷静に、観察するように、私を見つめ続ける。

私はただ魅入られたように固まったまま、その冷たいアイズブルーの瞳を見つめ返していた。

どれ位の時間が経っただろうか。

全てを暴いてしまいそうな視線に、そろそろ耐えられなくなってきた頃、ようやくエルの身体が離れた。

長く感じたけれど、多分時間にしたら1分程度の事だったと思う。

「やはり、肉体が再構成されていますね」

「は？さいこうせい？」

「異界から召喚される物体は、界と界を通る際に1度分解され、出現時に再構成されます。だからこそ、質量の大きなものは召喚に向かないんです。過不足なく物体が再構成されるかどうかは、術者の力量があつてなお、運の要素が強いですから」

エルの話を聞くにつれ、わたしはぶっ倒れそうになった。

「そ、それって、わたしの身体が1回分解されて、そのうえ運が悪けりゃバラバラのまま死んでたってこと！？」

「まあ、簡単に言えばそうですね。人為的な生体の召喚自体、成功するのが稀ですし、それが事故によるものとなると殆ど奇跡に近いと思いますよ」

運が良かったことを喜ぶべきなのか、今すぐ目の前の男をぶん殴るべきなのか……。

「あなた、もう少しで死ぬところだったんですよ」って話を、こんな研究発表するみたいに淡々と話されると、なんだか無性に腹が立つ。

「先程貴女は、突然こちらの世界の言語が話せるようになった、と言っていましたね」

「う、うん」

「外的要因がないとするなら、恐らく肉体の再構成により、一度存在が造り変えられたことが要因の1つかもしれません」

「造り変えられたってどこが？別にどこも変わってないけど」

「見た目の問題じゃありませんよ」

これ以上話すつもりはないのか、エルは言葉を切ると小さく首を振った。

「ルーラレイト卿、リ才様のお身体は大丈夫なのですか？」

エルの話聞いていたティアが、心配そうに訊ねた。

ああ、優しいなティアは。何処かの魔術師とは大違いだ。

「見たところ特に問題はなさそうですが、一応クラウド殿の所へ連れていきます」

「クラウドスって誰？」

「王宮の専属医ですわ。とても優秀な方ですよ。クラウド殿に診て頂けるのでしたら安心です」

瞬間、もの凄く嫌そうな顔になったのが、自分でも分かった。

「べ、別にどこも悪くないし、医者に診せなくても平気だよ」

「自分では気付かなくとも、万が一ということがございますわ」

「で、でも、わたし健康には自信あるし……」

「……何をうだうだ言ってるんですか。さっさと行きますよ。あ、シエステイア様はそろそろ部屋に戻ってお休みになって下さいね。あまり無理をなさると陛下がご心配されますから」

「わたくしは……」

何かを言い掛けたティアは、けれど逡巡したのちコクリと頷いた。

「ええ、わかりました。ではルーラレイト卿、リオ様をお願いしますね」

「もちろん、御任せください」

「ちよつ、ちよつとまって！」

腕をガシツと掴まれ、そのまま引き摺られそうになったわたしは、慌てて懇願した。

「だったらせめて！その前にお願いがっ！」

「……なんなんですか、一体」

面倒臭そうな冷たい眼差しに見据えられ、わたしは急いで愛する机ちゃんに駆け寄った。

心の中で「エルには鬼畜のドS系キャラとしての素質があるな。あとはアイテムとしてメガネが欲しいところだ」とかなんとか妄想してしまった事は、あえて言うまい。

「この机なんだけど、誰にも中を見られたり、いじられたりしないように出来ない？ ティアも部屋に戻っちゃうなら、置きっぱなしはちょっと不安で」

「そんなに大事なものなんですか？」

そのボロい机が？、と言わんばかりの口調である。

それでもわたしが思いっきり頷くと、エルは「仕方ありませんね」と言っ、机に魔法をかけてくれた。

原理は分からないけど、わたし以外の人間には引き出しを開ける事が出来ないようにしてくれたらしい。もちろん机の上に出していたものは全て中に仕舞っておいた。

「その机は、後で貴女の部屋に運ばせておきますから……って、今度は何をしているんですか」

「ついでにコレも何とかしてもらえないかと思って。腐らないように保存する方向で！ てへっ」

とっておきの笑顔とウィンク、おまけにちよっぴり舌まで出したというのに、わたしの両腕に抱えられた大量のケーキを見たエルの瞳からは、氷点下の如きツンドラブリザードが放たれたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0954u/>

ある日世界の向こう側

2011年7月9日14時55分発行